掲載許可番号：d20220513-01

シイタケの魅力 無限

西予・野村横林地区 ブランド「霧源」命名

特産品のブランド化で地域活性化を図ろうと、西予市野村町横林地区の生産者らが奮闘している。同地区で栽培する農産物を「霧源（MUGEN）」と名付け、ブランドロゴを制作。今春からは、同地区で栽培が盛んな原木生シイタケに霧源ブランドを冠し、県外飲食店への売り込みを始めた。評価は上々で、住民は販路拡大に期待を寄せている。（山内拓郎）

特産の原木生シイタケなど農産物のブランド化を進めている西予市野村町横林地区の生産者

「芳醇（ほうじゅん）で軸までおいしい横林の名物。地域内外に広め、価値も高めたい」。直径10センチほどで肉厚のシイタケを手に、横林原木椎茸生産組合の高橋征敏さん(41)が語る。

県外飲食店「香りや歯応え抜群」

地域自慢の原木生シイタケを収穫し、笑顔を見せる横林原木椎茸生産組合の高橋さん

高橋さんが所属する同地区の地域づくり組織「横林自治振興協議会」は2019年、農家の収入増加と後継者育成に向け、事業主体が積極的に申請する市の「手上げ型交付金事業」を活用。農産物のブランド化に着手した。農家以外の住民や外部のデザイナーも加えたプロジェクトチームを結成し、名称の考案などブランド戦略を協議してきた。

「霧源」のブランド名は、冬場、同地区内に多発する朝霧と基幹産業であるシイタケ栽培が今後も無限に続いていくようにとの願いを込め、20年3月に命名。21年6月には商標登録した。21年産からブランドロゴを付けて売り出した原木生シイタケには、霧源の希少価値を高めるため規格を設けた。かさの直径8センチ以上、厚み3センチ以上を最高級と規定。同組合によると該当分は年間生産量約3トンのうち1～2％と貴重な一品となっている。

県の事業を活用し、22年2月から関東や関西の飲食店に対し原木生シイタケの販促活動を実施。飲食店関係者から「香りや歯応えが抜群」との評価を得た。4月末時点で数店と取引を始めており、23年分の予約も取り付けているという。

農産物ブランド「霧源」のロゴステッカーを貼り付けて商品化した原木生シイタケ

現在、霧源ブランドは原木生シイタケだけに適用しているが、対象を順次拡大する予定。横林自治振興協議会長の井上謙二さん(67)は「まずはシイタケの魅力を発信しながら横林地区のファンを増やしたい」と意欲を見せている。

新レシピ 短大生と開発 バーガーやパスタ

松山東雲短大生によるレシピ開発研究の最終報告を聞く住民ら

西予市野村町横林地区で生産する原木生シイタケの霧源をPRするため、住民と松山東雲短大が2021年度、共同でオリジナルレシピの開発に挑戦した。

開発を担ったのは、食物栄養学科の学生だった高地智美さん(23)と高橋彩さん(36)。2人は自宅やピールしてほしい」と横林公民館主事の周藤功治さん(45)が短大に声をかけ、21年4月に着手した。

霧源を使ったレシピをオンラインで住民らに発表する高地さん（上）と高橋さん

4ジャンル計11品をそろえ、住民8人にアンケート士として県内で働いている2人はシイタケが苦手な人にも食べてもらえるようなメニュー開発を心がけたといい「レシピが広がり霧源のPRにつながればうれしい」と話した。

周藤さんは「今後の展開が期待できる成果。活用したい」と感謝し、リーフレットでの周知や地区内のカフェでの商品化を検討するとしている。

クヌギ原木豊富 好環境 県内有数の産地

西予市は原木干しシイタケ生産量全国上位の県内で、大洲市、内子町に次ぐ生産地。中でも肱川と黒瀬川の合流地点に位置する西予市野村町横林地区は、JAが「うわ笠」201年出荷量の約9割を占めており、県内有数の産地になっている。

横林原木椎茸生産組合の高橋征敏さんは「地域の環境上、シイタケが特産品になるのは自然なことだった」と話す。

シイタケ栽培に欠かせないクヌギの原木が豊富で、芽が出る冬季には朝霧が多発。適度な湿度が保たれ、乾燥を嫌うシイタケにとって「絶好の環境が整っている」と胸を張る。

高橋さんによると、栽培せざるを得ない背景もあった。急傾斜地が多い同地区は水田や畑が少ない。住民は1950年ごろまで、生い茂るクヌギの原木をまき材や木炭に活用して生計を立てていたが、燃料革命で事情が一変。栽培条件を満たすシイタケに活路を見いだすようになったという。

旧横林村誌によると、当時は地域の主要物としての認識が薄かった。「55年ごろは『自家用の範囲を出ない』『取り上げるほどのものではない』との記述もある。

「正確な記録はない」と早急に進めないと、横林公民館主事の周藤功治さんは「特産品となったのは恐らく約30年前から」と語る。

65年ごろ、同地区に隣接する旧肱川町では町森林組合がシイタケの共販・出荷体制を整備。生産量を増やし、林道開設など国の支援も得た。以降、横林地区でもシイタケ栽培を仕事にする農家が出始め、90年ごろからは県や国の品評会で同地区産が高く評価されるようになった。地域内では自然と「横林自慢の産品」とうたうようになったという。

肱川と黒瀬川の合流地点で、急傾斜地が多くクヌギの原木が豊富な西予市野村町横林地区

地域環境を生かしてシイタケ栽培を活性化させたが、約30年前に約10トンだった生産量は現在3分の1足らずの約3トンまで減少。生産者数も年々減り産業存続の岐路に立つ。組合内で唯一の専業農家の高橋さんは「価値向上と後継者育成を早急に進めないと、横林のシイタケを守れない」と危機感を強めている。

「価値高め 仲間増やす」 協力隊員 草葉さん

西予市野村町横林地区でシイタケ栽培に励む地域おこし協力隊の草葉さん

クヌギの原木がぴっしりと並ぶ山中のほだ場で1人、洋楽を聴きながら菌を打ち込む時間が「心地いい」という。西予市野村町横林地区の地域おこし協力隊としてシイタケ栽培に力を入れる草葉啓寿さん(26)。農業は初心者だが「周りは名人みたいな住民ばかり。失敗は少ない」と同地区で就農することの魅力を語る。

県内有数の原木シイタケ産地である同地区も少子高齢化の波を受けている。最盛期の約30年前には約20人いた生産者は10人に半減している。

課題解消に向け同地区は協力隊の受け入れを進め、2020年3月に兵庫県尼崎市から草葉さんが着任。草葉さんは大学休学中に訪れたオーストラリアで経験した農業の楽しさを忘れられず、卒業後すぐに協力隊に応募し同地区に移り住んだ。

草葉さんをサポートする横林自治振興協議会長の井上謙二さん(67)は「若者を支えようとの思いが浸透し、生産者を含めた地域の一体感は強まっている」と協力隊受け入れの効果を語る。

草葉さんは重労働のシイタケ栽培を黙々とこなす高齢者の姿に驚きを隠さない。年明けから植菌し、4月以降にほだ木を組み上げ、11月以降は出始めた芽に袋をかけていく。並行して、10月ごろには原木を伐採。力仕事が多く「先輩たちも1人では困難で、数人で協力し合う体制の構築が不可欠と感じている」という。

現在は住民から譲り受けたほだ場でほだ木約240本を管理。今冬は本数を倍増させて栽培に臨むつもりだ。「シイタケの価値を高め農家でも生活できることを示し、最終的には仲間を増やしたい」。住民と支え合いながら地域活性化を目指す草葉さんは、23年3月の任期満了後も定住して栽培を続けようとしている。